

人間狩り

小林久三



角川文庫

人間狩り
にんげんが



昭和五十三年二月二十日 初版発行
昭和五十四年九月二十日 三版発行

定価は、カバーに
明記してあります

著者 小林久三
こばやし きゅうぞう

発行者 角川春樹

印刷者 高橋茂

東京都中央区湊三ノ五ノ十

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
株式会社 角川書店
電話東京(265)七三二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

正進社印刷・本間製本

0193-143805-0946(1)

人 間 狩 り

他 四 篇

小 林 久 三



角 川 文 庫

4025

目次

残酷な雨の果てに	五
赤く流れる酷い河	八三
追われる	一三七
みえない電車	一八五
人間狩り	二三九
解説	三四九

升本喜年

残酷な雨の果てに

「誘拐……だれが!?」

尾坂捜査課長は、送話器に向かって怒鳴りつけるようにいった。

「だれが、誘拐されたんだ!?」

「洋一よ……洋一だわ」

受話器の奥から、妻の美知子の声がかえってきた。動転しているのだろう。ふだんより、ややカン高く、ききとりにくい声だった。

「洋一が?」

そうきき返して、尾坂は受話器をにぎり直した。息子の洋一の顔がちらと頭をかすめた。だが、まるで信じがたい。

へそんな馬鹿な!」

尾坂は唇を曲げて、

「洋一が誘拐されたと、どうしてわかった?」
と、冷静な調子できいた。

「電話があつたわ」

「どんな？」

「おたくの息子さんを預かった。条件などについては、あとで連絡する。電話があったことを、ご主人につたえてほしい……って」

おれに？ と、ぎき返して尾坂は緊張した。

「ええ」

「電話があったのは何時頃だ？」

「たったいま」

「たったいま？」

尾坂は鋭く問い返すと、腕時計に目を落とした。午後二時三十二分だった。妻宛てに電話があったのは、二時半前後とみて差支えない。

「それで、洋一は？」

「幼稚園からまだ帰ってないわ」

「いつもは帰ってる時間なのだな」

「二時十五分には、園児バスで送られてくるはずですよ」

「幼稚園に確かめてみたのか」

「まだよ。とりあえずあなたに連絡を——」

「わかった」

尾坂は、美知子の言葉をさえぎると、つかのま視線を宙に流したが、すぐに、

「まず幼稚園に電話をして、洋一が園を出たかどうかをはっきり確かめるんだ。園児バスで帰ったことがわかったら、同じバスにのっていた友だちに会って、事情をきけ。同時に近所に洋一のことをきいてまわるんだ。いたずら電話の可能性もある」

「わかったわ」

「一時間後に、こっちから電話をいれる。それまでには自宅にもどってくれ」

「いいわ」

「じゃ」

尾坂は電話を切ろうとしたが、

「電話をしてきた男は、おれにつたえろといったんだな」

「そう。警察にいるあんたのご主人に連絡してくれって」

「警察にいる、といったのか、相手は」

「まちがいなく、そういったわ」

「わかった。……一時間後に電話をする」

尾坂はそういうなり電話を切り、目の前の黒い受話器をみつめた。

かすかな不安が胸に湧いた。

「相手は、おれの身分を知っている」

もし、洋一の誘拐が事実なら、犯人はなにを狙っているのか。おれは一介の刑事課長にすぎない。捜査が専門だが、たんなるサラリーマンである。土地や財産があるわけでもない。臨時収入の道もない。ふつうのサラリーマンと同じように、物価高にあえいでいる平凡な中年の男なのである。

身代金めあての営利誘拐だとは、考えられなかった。おれが津川署の捜査課長だと知っていて、息子の洋一を誘拐したとすれば、犯人の狙いは、もっとべつのところにあるとみていい。

犯人の意図を考えたとき、尾坂は胸がつかまるような圧迫感を覚えて立ちあがった。直感的に、犯人の狙いは、捜査の妨害にあるのではないか、と考えたのだ。

気分をしずめようとして、窓ぎわに立ち、煙草をくわえた。

目の下には、津川市の繁華街がひろがっている。近年、この街はすさまじく変貌した。東京資本のデパートや大型スーパーが進出して、高層ビルが林立するようになった。三年前に津川署の捜査課長として赴任したときにくらべて、街の雰囲気は一変した。

これを発展とみるかどうかは、立場によって異なってくるだろう。尾坂の立場からすれば、街が変貌するに正比例して、犯罪の発件数が増加した。繁華街の裏通りにバーやクラブ、トルコ風呂などが軒をならべはじめた。彼にいわせれば、それは陽のあたらない湿地帯で隠花植物群が繁茂していくようなものだった。

この湿地帯の占有権をめぐって、地元の暴力団の「岩崎組」と横浜に本拠をおく「白竜会」と

の対立抗争が激しくなった。

つい二日ほど前の七月三日の昼にも、津川銀座裏のパチンコ店「万玉会館」の手洗いで、チンピラふうの男の死体が発見された。男は「白竜会」所属のチンピラの山下三郎だった。

死因は扼殺^{やくさう}だった。

「岩崎組」の勢力下にあるパチンコ店に出入りしたため、山下三郎は殺害されたものだろう。本来なら、死体は「万玉会館」から運び出され、郊外の丘陵^{きゅうりやう}の山林奥に埋められてしまうところだ。

だが、店内には目撃者がいた。

山下が店内にはいつてきて、男性用手洗いに引きずりこまれるのを目撃した客のひとりが、津川署に通報したのである。東京からきた化粧品店のセールスマンだった。

すぐさまパトカーが「万玉会館」に走り、山下三郎の死体を発見した。だが、犯人はすでに店内から姿を消していた。裏口から逃げたのだろう。

目撃者のセールスマンの話によると、犯人は三十歳前後、長身で、どす黒い顔色をした男だったという。目つきが異常に鋭い男で、オフ・グレイの背広の上着を手にもっていたらしい。その男には、若いチンピラふうの男が二人したがっていた。

目撃者の証言で、犯人はじきに割れた。

「岩崎組」幹部の元木博だった。元木以外に、この人相に該当する男はいない。

元木博の正確な年齢は二十八歳だが、若いだけに非情で荒っぽいことにかけては、無類とされていた。腕力もあり、拳銃^{けんじゅう}さばきの巧みさの点で、彼の右に出るものがないという。

「白竜会」の侵入阻止の尖兵^{せんぺい}的役割を果たしている男であった。「白竜会」の連中も、彼をもっともおおそれて、さそりと呼んでいた。それだけに、組の連中は彼をたよりにしていた。組長の田坂の信任もいちばん厚いらしい。

署内にもうけられた捜査本部では、ただちに元木博に出頭をもとめた。だが、元木の姿は街から完全に消えていた。

逮捕^{たつほ}をおそれて、いちはやく逃亡したのだろう。捜査の指揮をとった尾坂は、元木の指名手配に踏みきった。これを機会に、徹底的に組の内部にメスをいれ、「白竜会」との対立抗争に終止符を打とうとしたのである。

元木の逮捕以外にも、組の幹部を賭博^{とばく}行為の容疑や銃剣等不法所持の疑いで、びしびし検挙しはじめた。同時に、「白竜会」のチンピラどもが市内に徘徊^{はいかい}するのを徹底的にマークしはじめた。そのやさきに、息子の洋一が誘拐^{きうがい}されるという事件が起こったのである。

へ妻への電話は、たんなるいやがらせやいたずらではない。

そんな暗い確信が、尾坂の胸にひろがりはじめた。だが、どこかまだ信じがたい。

「どうするか」

尾坂は独り言のように呟^{つぶや}いた。洋一の誘拐が事実なら、これは警察にたいする挑戦^{ちようせん}ではないか。

警察というのが大げさならば、おれにたいする「岩崎組」の挑戦ないし挑発といえるだろう。

怒りで、胸がかつと熱くなった。

「洋一は、いまだどこにいるのか」

結婚して四年目で、やっと生まれた子どもなのだ。生まれつき、からだが弱かった。女の子のように色が白く、切れ長の目をしていた。いわゆる腺病質^{せんびょうしつ}タイプで、感受性が人一倍するどい。警戒心もつよくて、他人にはなかなかなじまない。ひとみしりをするのである。

その洋一が誘拐された――。

幼稚園から帰る途中を、なかば暴力的に連れ去ったとしか考えられない。

かけがえのない一人息子なのである。病気がちで神経質な息子を、ときに歯がゆくおもうこともあるが、それだからこそ逆に可愛がってきた。掌中の玉^{しょうちゅうのたま}、という古風な表現があるが、尾坂にとって洋一はまさになにものにもかえがたい存在だった。小学校入学を来年にひかえた五歳になる今日まで、文字どおり溺愛^{でくあい}してきた。

「洋一……！」

尾坂は窓ごしに街を眺め^{なが}降ろしながら、口のなかで低く叫んだ。洋一の誘拐が確認されたらすぐに署長の熊井に告げて、すぐに捜査に入るべきなのかどうか。捜査は当然、極秘裏にすすめられるだろう。その場合、捜査の指揮をとるのは、いったい、だれなのか。

捜査から、おれははずされるだろう。捜査に私情がはいるのはゆるされないからだ。

捜査の指揮を熊井署長がとるにちがいないが、おれは捜査の進行を横目でにらんで黙っていないければならないのか。

へそんなことはできない

尾坂は頭のなかで唸った。邪道であることは百も承知しているが、単独で捜査をすすめていくにちがいない。多分、死にもの狂いになって……。

目のうらに、父親の泰造の姿がすべりこんできた。元津川署刑事。津川署ばかりではなく、隣の相模原署や厚木署など、神奈川県さがみはらの北部を中心にして、三十五年間、刑事をつとめてきた。その間、一貫して暴力団を担当してきた。

「尾坂泰造」

といえば、古い暴力団の連中からのもとも煙たがられ、敬遠されてきた男だ。六十二歳を過ぎ、痛風をわずらって刑事を退職したが、瘦せて小柄なからだには、いまだにチンピラを縮みあがらせるだけの鋭さと威圧感のようなものが漂っている。妻、つまり尾坂の母が病死してから、ひとりで津川市郊外の市営住宅に住んでいる。尾坂はなんども父親を家に引きとろうとしたが、そのたびに元氣なうちは息子の厄介になりたくない、と断りつつづけている。退職金と恩給で生活費にはこと欠かず、基会所で一日過ごしたり、中古車を運転してドライブに出かけたりして、気ままな生活を送っているようである。

週に一度ほど、尾坂の家をたずねてくることがあった。たったひとりの孫が可愛らしく、た

ずねてくるたびにプラモデルやケーキなどの土産をもってくる。洋一もなついているらしく、

「お祖父ちゃん、お祖父ちゃん」

と、泰造にまつわりついた。

「親父に協力してもらうか」

尾坂はそう考えた。暴力団の内情には、自分などよりもはるかにくわしいはずである。部下のどの刑事よりも頼り甲斐がありそうであった。

そう考えると、尾坂は気が楽になった。

窓ぎわを離れてデスクにもどり、短くなった煙草を灰皿に押しつぶそうとした、そのときだった。

目の前の電話が、ふたたび重苦しく鳴りはじめた。

2

尾坂は弾かれたように電話をとった。

受話器の奥から男の声がながれてきた。

「捜査課長の尾坂だね、あんたは」

「ああ」

尾坂はうなずいて、挑むようにいった。

「おれだ、きみは」

「元木だよ」

「モトキ？」

「元木博だ。あんたが殺人容疑者としてつかまえようとしている……」

と、男は無造作に答えた。語尾にかすかな笑いをふくませた。

「いい度胸だ。警察に電話してくるとは」

尾坂は冷静な調子でいった。電話の男は、ほんとうに元木なのか。元木の声をきいたことはいが、刑事課長のおれにこんな不敵な電話をかけてくるのは、チンピラにできる芸当ではない。元木博と判断してまちがいなさそうだと彼はおもった。

「捜査から手をひけ」

電話の向こうで、元木はいった。

「どういう意味だ？」

尾坂は反撥はんばつを口にした。元木がつづけた。

「おれを追うのはやめろ」

「なぜ」

「これ以上、おれを追えば、あんたの息子を殺す」

「洋一を？」